

中小の現場をけん引



ほう・なんほ 1947年生まれ。倉敷市出身。78年東京大学大学院医学系研究科博士課程修了。富山医科薬科大（現富山大学）医学部教授、岡山大学大学院歯学総合研究科教授などを経て2009年から現職。専門は細胞生物学。

岡山大学医学部は、地域医療に三つの大きな役割を担ってきたと考えられる。一つは優れた医師の養成、二つ目は地域の病院や診療所などの緊密な医療連携、三つ目は医師の生涯教育研修への貢献だ。医師の派遣では、常勤医師として、あるいは非常勤医師の役割も重要な役割を果たしてきた。地域医療再生計画を策定している岡山県や、若い医師の研修を積極的に受け入れている地域の医療機関は、魅力を伝える取り組みを強めている。許南浩・岡山大学医学部長、佐藤勝・岡山大学大学院歯学総合研究科地域医療人材育成講座教授、片岡仁美・同講座教授、金田道弘・金田病院院長、佐々木健・岡山県保健福祉部長に、地域医療の現状と課題、さらにあるべき姿を話してもらった。聞き手は木山博雅・山陽新聞社論説委員会主幹。（文中敬称略）

岡大が果たした役割

岡山大学医学部は長年、地域医療に大きな役割を果たしてきたことから、その存在感は大きい。実績をどう見ているのか。

許 中四国の医療水準向上

許 岡山大学医学部はその140年の歴史の中で1万2千人余りの卒業生を送り出したが、現役医師の9割は第一線の医療現場で働いている。2500におよぶ中四国を中心とした関連病院との人事交流も盛んで、先端医療がいく早く地域の医療機関に伝わり、地域全体の医療水準の向上につながっている。私たちが理念として掲げる「あなたをそばに先進医療」は、このような岡山大学医学部の歴史と伝統が培ったものであると言える。

佐々木 岡山県は、全国と比べても、岡山大学医学部など中核大学と地域医療の連携がうまくいっている印象を持っている。医療水準が高いことも特長で、こ



さとう・まさる 1963年生まれ。島根県斐川町出身。88年自治医科大学医学部卒。島根県立中央病院、隠岐病院、都万村保健医療福祉総合センター所長、哲西町診療所長などを経て2010年5月から現職。専門は地域包括ケア。

全学生に地域医療実習を 佐藤



かたおか・ひとみ 1972年生まれ。岡山市出身。97年岡山大学医学部卒。岡山大学病院腎臓・糖尿病・内分泌内科、総合診療内科、医療教育統括開発センターなどを経て2010年5月から現職。専門は糖尿病内科、医学教育。

これは岡山大学医学部が優秀な人材を送り出しているからだと言える。同窓や同門などの人的ネットワークが密で、プロとしての絆も強い。

岡山県は、岡山大学医学部出身の石井十次郎の人名を輩出するなど、医療・福祉界として歩んできた。こうした視点や歴史は、岡山県と福祉の現場に根付いているし、なかでも岡山大学医学部の功績は大きい。医学部が今、地域医療にも今まで以上に、力を入れていることに期待している。

許 ただ、社会状況や人々の医療への期待の変化に応じて、教育の方法も変革が迫られている。長い歴史と伝統を受け継ぐ責任の重さを自覚し、地域医療の課題を克服するために、現状に満足することなく、自己点検をしながら、新しい教育と連携の在り方を模索したい。

片岡 女性医師の復帰を支援

片岡 地域医療マインドを培うカリキュラムで、学生・研修医教育に当たっている。こうしたことから、岡山県から岡山大学への委託事業として、県北に8人が勤務するに至った。地域医療総合支援センターについては、医療人全体の教育リソースを提供していく計画。復職支援や、インターン・リターン支援、シミュレーション教育、eラーニングなどで、現場医師に最新の技術や情報を伝える。勉強ばかりではなく、コミュニケーションの場としても活用したい。

再生計画との連携

岡山県は、県地域医療再生計画を策定している。計画の概要や地域医療総合支援センターの創設準備など岡山大学医学部との連携は、

佐々木 医師の数は、全国平均を上回っているが、地域によって偏りがある。岡山県では、岡山県地域医療再生計画に沿って、国からの交付金を活用し、岡山大学医学部寄附講座（地域医療人材育成講座）を設置し、さらに地域医療総合支援センター創設を進めている。2013年度までに、高梁・新見・真庭地域で2割、津山・英田地域で1割、病院の医師数を増やす計画だ。

も、大学教育が六年制になった薬剤師も不足していて、特に医師不足が深刻。一方で救急医療を例に挙げると、われわれの真庭地域においても、救急車による受け入れ件数は、十数年前の三倍に増加しているが、医師数は増えていない。

佐藤 患者の幅広い医療ニーズに、例えば専門外であっても、対応していく度量が地域医療には求められる。一方で、昨今の医療訴訟問題も、重くのしかかり、専門外の診療にしろ込みを恐る医師が多いことも事実。地域医療を支え続けようとする医師にとっても、生活面では、子どもの教育や親の介護などの問題もあり、課題は多い。

岡山県地域医療再生計画



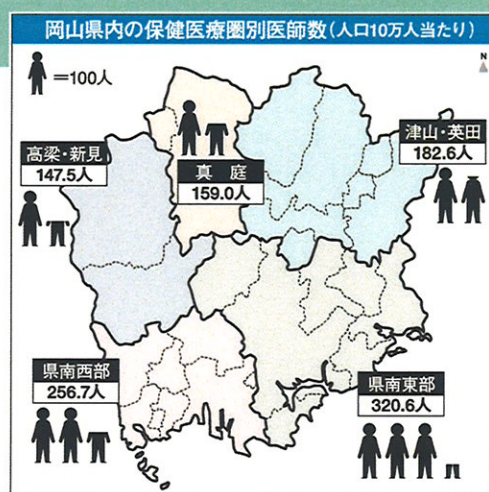
岡山県地域医療再生計画の一環として県の寄附により岡山大学が開設した地域医療人材育成講座。同大医学部1年生に地域医療の魅力などを語る佐藤教授（右）と片岡教授（中央奥）

地域医療再生計画は、深刻な医師不足解消などを狙いに国の特例交付金を財源に各都道府県が策定。本年度から2013年度までを期間とし、計画ごとに25億円が基金として交付される。岡山県の計画は今年1月にまとめられ、地域や診療科による医師の偏在、県北地域の医療提供体制の整備などの課題への対応策を盛り込んでいる。

具体的には、医師数が県平均を下回り、救急医療体制も脆弱な県北部の「高梁・新見・真庭地域」と「津山・英田地域」を対象領域とする2計画を作成しており、交付額は計50億円。病院の医師数を2013年度までに現状より、「高梁・新見・真庭」で2割増、「津山・英田」は1割増とする目標を掲げている。

岡地域の医師を増やすため、目標に掲げる医療機関に一定期間勤務することが条件の臨床研修医向け奨学金制度を創設したり、医師派遣を前提とした寄附講座を大学内に設置したりする。さらに「高梁・新見・真庭」は、救急患者の受け入れ態勢の強化に向けた病院施設の増強整備を支援。「津山・英田」では、休日・夜間病棟の設備充実を後押しする。

医師不足に対応 県北1〜2割増





佐藤 このたびの大学の研修制度により、診療所で体験を積むことができるようになったことは重要な。地域医療研修は、これまでなかったもの。若い医学生にとっては、体験を通して、地域医療の現場に、やりがいや魅力を実感できる。もってこの機会になるからだ。

―教養部が廃止されたが、教養教育と専門教育の問題がまだに取らてきた中、地域医療研修は、医学生にとって、教養と専門両者の教育機会となるだろう。

許 これからは、大学だけが教育を

動き始めた研修

出席者

岡山大学医学部長 許 南浩氏
岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 地域医療人材育成講座教授 佐藤 勝氏
岡山大学大学院 医歯薬学総合研究科 地域医療人材育成講座教授 片岡 仁美氏
社会医療法人緑社会 金田 道弘氏
岡山県保健福祉部長 佐々木 健氏
コーディネーター 木山 博雅 山陽新聞社論説委員会主幹

「総合医」育成送り出す



かねだ・みちひろ 1954年生まれ。真庭市出身。79年川崎医大卒。岡山済生会総合病院勤務などを終って父が開設した金田病院へ。98年より現職。岡山大学医学部臨床教授、NPO岡山医師研修支援機構副理事長なども務める。

病院間の協力不可欠 金田

佐藤 地域医療を大学教育に生かすために、今年5月から、診療所の医師である私も教員として授業を行っている。地域での研修のほかに、他学部・他大学の薬学生や看護学生、介護リハビリの学生などワークショップもしている。9月には、実習の様子を山陽新聞の1面に取り上げられるなど、マスコミからも注目されている。まだまだ緒に就いたばかりだが、すべての医学生に体験していただきたい。

―女性医師や看護師の復職支援も、積極的に進めていると聞く。

片岡 文部科学省の選定事業として、2007年度から3年間、柔軟な勤務体制の実現などに取り組んだが、この間、

金田 4年半前に立ち上げたNPO岡山医師研修支援機構の地域医療部会は、中小病院の院長をはじめ、行政、岡山大学医学部、弁護士、マスコムの皆さまがメンバーに名を連ね、毎月40人が集うまでに輪が広がった。真庭地域でも、全病院が連携して情報を共有し、一帯の消防本部に各病院の当直体制を提供するなどしている。集約化や機能分化を視野に入れた、地域の病院同士が、情報交換や役割分担を自ら積極的に進めようとする真の協力体制が不可欠だ。

佐々木 中核病院を守るだけでも大変

あるべき姿とは

―地域医療を大学や行政がバックアップしてこういう機運の中で、地域がなければならぬことは、何か。期待される地域医療の自主性やあるべき姿は。

金田 4年半前に立ち上げたNPO岡山医師研修支援機構の地域医療部会は、中小病院の院長をはじめ、行政、岡山大学医学部、弁護士、マスコムの皆さまがメンバーに名を連ね、毎月40人が集うまでに輪が広がった。真庭地域でも、全病院が連携して情報を共有し、一帯の消防本部に各病院の当直体制を提供するなどしている。集約化や機能分化を視野に入れた、地域の病院同士が、情報交換や役割分担を自ら積極的に進めようとする真の協力体制が不可欠だ。

佐々木 医師数増やし偏りは是正



ささき・たけし 1967年生まれ。大阪府出身。93年和歌山県立医大卒。広島県福祉保健健康課課長補佐などを経て2010年8月から現職。

片岡 地域医療をけん引する総合医教育は、求められるものが幅広い。しかし、地域医療の教科書も少なく、またその教育内容は確立されていない。しかし、だからこそ地域に貢献し患者さんのための医療を実践する人材を育てる教育の意義と可能性は大きい。これをいける教育を提供していかねばならない。

許 地域医療の充実を図るなら、関係者すべての協力が欠かせない。まずは、コミュニケーションが自らの地域医療をどうするか、主体的に取り組む必要がある。大学は、コミュニケーションの一員として、先端医療やトータルレベルのニーズを果した人材の育成など求められるニーズを果した。地域医療の問題は緊急な課題であるが、教育は10・20年後を見据えてしっかりと取り組んでいく必要がある。歴史と伝統を支えられた岡山大学医学部は、今後とも、地域と行政との連携のなかで、地域医療を支えることも大きな貢献をし、これまで信頼し支えてくださった皆様の期待により一層応えようとする努力したい。

佐藤 集約化の一方で、へき地でもCT（コンピュータ断層撮影）や内視鏡など最先端の機器導入も並行して行ったうえで、時間や診療科目を問わない気概を持つなど、温かい診療マインドを忘れなければ、患者はついてくるだろう。このためには、地域や行政の理解と支えが必要だ。医療関係者と地域、行政が支え合えば、お互いにメリットがある。こうした地域を訪れた若い研修医は、きっと魅力を感じるだろう。

片岡 地域医療をけん引する総合医教育は、求められるものが幅広い。しかし、地域医療の教科書も少なく、またその教育内容は確立されていない。しかし、だからこそ地域に貢献し患者さんのための医療を実践する人材を育てる教育の意義と可能性は大きい。これをいける教育を提供していかねばならない。

な。時世。国内のどの医療機関でも、病院間の「すみ分け」は容易ではないため、同医療部会の取り組みは、大変評価できる。岡山には、地域医療を支える優れた人材に恵まれている。地域が真摯に医療従事者を求めるなら、若い医師も魅力を感じるだろうし、行政としては、呼び寄せる場合の後押しもできると考える。

地域医療総合支援センター

核施設となることを目指す。救命処置、麻酔、周産期医療などのトレーニングの提供が想定されている。

2階はオフィスとコミュニケーションのフロアとして、ミーティングスペースのほか、県北などの遠隔医療施設とリアルタイムで情報を共有できるシステムの構築を目指す。また、オープンな学習コーナーも設ける。3階には最大150人程度が受講できる多目的講義室を設置。講義のみならず、各種実習にも用いること可能な開かれたスペースとしての役割が期待される。

具体的な研修としては、医師らが集まりやすい土、日曜日や平日夜間の利用を想定。救命処置や麻酔などの実習のほか、子育てなどで職場を離れた女性医療従事者の復職支援なども予定。さらにセンターに向くのが難しい県北など遠方の医療現場への出張研修なども行う予定。

開設準備に当たる同講座は「集まりやすく、お互いに顔の見える空間を目指し、岡山と地域医療機関の連携、また地域の病院・医療機関同士の連携につなげていく」としている。

情報交換の場や各種研修に活用

地域医療総合支援センター（仮称）は、岡山大学医学部のある岡山市北区の鹿田キャンパス内に創設する地域の医療従事者育成拠点施設。岡山大学が運営し、同大の地域医療人材育成講座を担当するスタッフが常駐、各種研修や情報交換の場として活用する。岡山県が地域医療再生計画の事業として整備を支援する。本年度中の着工、2011年度中の完成を目指す。

構想によると、同センターは約380平方メートルの敷地に建設。3階建てで、延床面積は約1000平方メートル。1階は医療人の生涯教育のフロアとして構想中である。高機能シミュレーターなどの最新の医学教育設備を整備し、座学では学ぶことの困難な技術トレーニングやチーム医療の研修を提供できるスペースとなる予定。教育リソースの提供によって医療人の生涯教育と地域の医療力の向上に貢献する中

地域医療人材育成講座



地域医療人材育成講座の診療所実習＝哲西町診療所

へき地診療向け総合能力を養う

今年9月には同講座の医療実習が、哲西町診療所（新見市哲西町矢田）、金田病院（真庭市西原）、川上診療所（高梁市川上町地頭）、大原病院（美作市古町）、宗義ファミリークリニック（宗義町豊沢）、金光病院（浅口市金光町占見新田）の6医療機関で実施。医学部の9人が参加した。実習生は、血圧測定をしたり、医師による胃カメラ検査を見学したり、往診に同行したりし、現場に触れることで、地域医療の重要性を学んだ。

地域医療人材育成講座は、岡山県地域医療再生計画の一環事業。県北部を中心とした医師不足対策として岡山県が総額1億2000万円を岡山大学に交付し、今年5月に岡山大学大学院医歯薬学総合研究科に開設された。

講座は、長年、地域医療に携わってきた医師ら2人を教授として配置。内科、外科、小児科など、へき地医療に求められる総合的な診療能力を持った医師の育成、県北の病院での診療支援、医師確保に向けた行政や医療機関のネットワーク構築、女性医師の復職支援などに取り組む。